第４節　静岡県の礫石経～角庵Ⅱ遺跡礫石経塚をめぐって～

１　はじめに

角庵Ⅱ遺跡からは小さな礫石に墨で経文を書写した礫石経が出土した。通常、礫石経は一文字ずつ書写したものは一字一石経、または数文字ずつ書写したものは多字一石経と呼ばれている。書写された経典の多くが『妙法蓮華経』（以下，法華経）で、この経典を一文字ずつ書写すると69,000余個の礫石が必要となる。角庵Ⅱ遺跡では礫石経を土坑の中に埋納していたが、ほかに第二東名高速道路に伴う発掘調査では藤枝市衣原遺跡においても角庵Ⅱ遺跡と同様に土坑に埋納された例が認められた（勝又2010）。

しかしながら、地上に標識となる塚を盛土してその中に収めたケースや建物の床下に納めたケース、石塔や石碑（経碑）、石幢、石仏の下に埋納したケースもある。地上の標識は削平されたり、石塔、石幢、石仏のように別の場所に移動したりすれば、角庵Ⅱ遺跡と同様に土坑に埋納された状態で検出されよう。

そもそも経典とは仏陀の説法を文字で綴ったものであり、とくに法華経については大乗仏教の最高の経典と考えられていたので、これを書写することや受持することは、読誦することとともに深い信仰表現として考えられていた。そしてその功徳として過去、現世、未来に連なる利益を得るとされていた。

したがって書写した礫石の功徳を得んという強い思いがあるので、地表にその標識を建立することは自然な思いで、角庵Ⅱ遺跡や衣原遺跡の場合も何らかの標識が設置されていたと考えることができる。

一般に経塚とは経典を書写し地中に埋めたもので、その上部に小さな塚が築かれた施設とされているが、築かれた塚も経典を書写したことを明らかにし、その功徳を得んと表示する役割とみることができる。書写した経典を納めることを第一義と考えるならば、塚を築くことや地下に埋納することはそれに付随する行為とみることができよう。したがって地中ではなく、地上の石造りの経箱や台座の中や地表面に礫石経を納めることもある。この点が古代から続く経塚の概念にはおさまらない点であり、近世の礫石経の特徴とみることができる。

礫石経の標識には積土の塚以外が多く、石塔や石碑（経碑）、石幢、石仏があり、そこには造営者の本願や旦那（壇越）の氏名、目的、写経した経典、造営や写経した年号が銘文として刻まれている。静岡県内の礫石経について、これらの点を重視し別表の一覧に示した。以下、一覧に示した内容を分析し、角庵Ⅱ遺跡の礫石経では資料不足のためわからなかった点でもある、どのような背景によって、どんな人々によって埋納されたかを考えることとする。そしてそれはこの地域の人々が礫石経に託した思いにまでふれる問題でもある。

２　礫石経と遺跡地名表（第34表）

静岡県教育委員会は埋蔵文化財の掌握のため、県内研究者を総動員し、県下の遺跡分布を調査した。その成果は昭和36（1961）年と同38（1963）年に『静岡県遺跡地名表』とその解説版というべき『静岡県の古代文化』という形で刊行した。後者の中で望月薫弘氏が「静岡県の経塚」を執筆しているが、その叙述には礫石経の出土地を含めている（望月1964）。

その後、遺跡地名表と遺跡分布図の改訂版が昭和54（1979）年に刊行された。この段階での経塚遺跡の取り扱いは、一部の研究者が中世や近世の塚や壇について経塚と誤解しているため、その取扱いに注意が必要な場合がある。昭和59年には関秀夫氏による『経塚地名総覧』（関秀夫1984）、昭和63年には鈴木良孝氏の集成（鈴木1988）の中にも、両書の基礎データがこれら遺跡地名表から引用されている。さらに現地調査によらないそのほかの文献を引き継いだため、経塚もしくは納経施設とそれ以外の遺構の

第34表　静岡県の礫石経出土地名表

No.	名　称	所　在　地	立　地	種類	地上標識	地下構造	年　代	造　営　者	目的	そ　の　他
1	北平1	浜松市北区三ケ日都築	平地　墓地	多字	自然石石碑		天保3	大野頼□	先祖供養	
2	北平2		平地　墓地		六角型龕		寛政10	大野三郎左衛門		石経の碑文
3	北平3		平地　宅地		石塔				金光明経	
4	佐久米	浜松市北区三ケ日佐久米	平地	多字	六角石幢	壺				
5	四方浄	浜松市北区引佐四方浄	丘陵端	多字	宝筐印塔	塔内	宝暦6		病消滅寿命延長	
6	正眼寺	浜松市北区引佐白岩	寺社境内		観音石仏			月潭澄		経塚供養塔の碑文
7	天神社	磐田市見付	社内陣	多字						妙法蓮華経巻八の墨書
8	大原墳墓群	磐田市大原	墓地	一字	塚	積石				
9	平松	袋井市平松	平地土塁	多字						伝四宮右近屋敷
10	龍巣院	袋井市五十岡	寺社境内	一字	観音石仏					
11	粟倉	森町粟倉	丘陵端	不明						中世墓か
12	万松寺	森町天宮	寺社境内		笠付		文化9	堀尾忠兵衛	菩提供養	石書一部塔の碑文
13	大洞院	森町橘	寺社境内		笠付		寛政3	石川・北島氏	地頭所安全	石書金光明・経王の碑文
14	三島神社	森町森	寺社境内							経塚の碑文
15	市居平1	掛川市中西ヶ谷	河岸段丘	一字	丸石					
16	市居平2		河岸段丘　墓地		自然石塔		天保8	鈴木伝次郎・安芸産独沙弥		1の経碑か
17	角庵Ⅱ	掛川市寺島	河岸段丘	一字・多字		土坑				
18	長福寺	掛川市本郷	寺社境内	一字	古墳の頂部					
19	経松	牧の原市上朝比奈	屋根先端		山型角柱		寛政3	伝源翁心照		経松供養の碑文
20	海老江	牧の原市海老江	丘頂	一字	古墳頂部		宝暦3		父母追善	一字一石の碑文
21	鈎月院裏山	牧の原市地頭方	丘頂		塚・角柱					納経塔の碑文
22	大沢	牧の原市大沢・園	丘頂	一字	角柱					
23	平田	牧の原市平田	平地	一字	角柱		寛政5	杉山氏		
24	智生寺	牧の原市坂口	丘頂	一字	塚・自然石		正徳・享保	格外		
25	泰善寺	牧の原市静波	寺社境内		地蔵石仏			義見		法華経一石一字の碑文
26	保全庵跡	牧の原市柿ヶ谷	寺社境内		観音石仏		文化2年	鈴木浅八・源兵衛		石書法華供養の碑文
27	妙昌寺	牧の原市細江青池	寺社境内	一字・多字	無縫塔	石室	宝暦～明和	大庵正道		法華・宝筐院陀羅尼書写の碑文
28	水ヶ谷	牧の原市水ヶ谷	平地							扁平な礫多数出土
29	山村山	牧の原市新戸	丘頂		塚					塚により経塚とされる
30	寺ノ坊	牧の原市伏方	墓地		石積の段					経塚か不明
31	祖父ヶ谷		寺社境内		石積の段					経塚か不明
32	石雲院	牧の原市坂口	寺社境内	礫石	石碑		元禄2	小机雲松院宗天		経碑は移動
33	経塚山	島田市大代	丘頂		石碑		寛延3		雨乞い	表面に礫多数
34	地蔵峠	島田市神尾	山腹		自然石		安永2			奉納石経の碑文
35	長源寺	吉田町神戸	寺社境内	一字	段・宝塔		寛政10	本間代五郎・台鏡		
36	馬場平	島田市笹間	河岸段丘	一字	塚			平作・日花など		
37	道悦	島田市道悦1丁目	墓地		自然石		慶応4	和田是心		奉納石経の碑文
38	東光寺	島田市東光寺	寺社境内		山型		明和8	頂英法印		石経の碑文
39	龍江院	島田市岸	寺社境内							納経塔
40	土平	川根本町青部	河岸段丘	一字・多字	塚	土坑				
41	衣原遺跡	藤枝市下之郷	墓地	一字		土坑				
42	長福寺	焼津市関方	寺社境内		灯篭型					納経塔
43	石経	焼津市飯淵	寺社境内	一字	地蔵石仏					
44	福寿院門前	静岡市葵区牛妻	寺社境内	多字						
45	ヒヤノ土手	静岡市葵区田町5丁目	墓地	一字	自然石		文化10	八木惣兵衛		
46	法蔵寺	静岡市葵区区曲金2丁目	寺社境内	一字	角柱		享保14	大原平八郎		
47	片山	静岡市駿河区大谷	集落内		層塔		天明2			碑文
48	龍爪山穂積神社	静岡市葵区平山	寺社境内	多字						
49	荒神塚	静岡市葵区東	山頂	礫石						石経さんの地名
50	卒塔婆山	静岡市葵区北沼上	山麓							
51	古庄	静岡市葵区古庄1丁目	集落内	礫石	石仏	甕				
52	聖一色	静岡市駿河区聖一色	集落内	礫石	自然石					石経塔の碑文
53	千手寺	静岡市清水区上原	古墳頂部	礫石	観音石仏		享保4			
54	光福寺	静岡市清水区柏尾	寺社境内	一字	笠付角柱		寛政11	道清		一石一字の碑文
55	光栄寺	富士市岩淵	寺社境内	一字	題目碑		文政13	甲州当村施入面々	流死者供養	
56	光栄寺		寺社境内	一字	角柱		元禄13	結衆	供養	法華石経の碑文
57	清源院		寺社境内	礫石	角柱		嘉永5	壇方・報恩忌	渡船安全	
58	天ヶ淵		河岸段丘	礫石	題目碑		文政13	甲州当村施入面々		
59	岩本1	富士市岩本	寺社境内	礫石	自然石		貞享3	鳳瑞	日蓮回忌	写経石の碑文
60	岩本2		寺社境内	礫石	山型角柱			妙代	題目碑	
61	岩本3		寺社境内	礫石	自然石					
62	松岡	富士市松岡	寺社境内	一字						一字一石の碑文
63	下横割	富士市下横割	寺社境内		宝塔		安永6	西尾		大乗妙典壱部の碑文
64	今泉	富士市今泉	寺社境内	一字	山型角柱		文化10			一字一石の碑文
65	伝法田端	富士市伝法田端	寺社境内	一字	自然石		文化10	神尾世津女		一字一石の碑文
66	厚原溝上	富士市厚原	屋根先端	礫石	自然石					書写供養塔
67	久沢中村	富士市久沢中村	橋の袂	礫石	角柱		弘化4	西村茂八		石経一部の碑文
68	今井町	富士市今井町	寺社境内	礫石	角柱		元禄4		仏身成就	石経全部の碑文
69	中里	富士市中里	平地	礫石	題目碑		元禄4			大乗妙典石経全部の碑文
70	中比奈	富士市中比奈	寺社境内	一字	五輪塔		宝暦5	古郡通□		大乗妙典塔の碑文
71	伝法	富士市伝法	平地	一字	経王塔		寛政2	渡部平右衛門定常		
72	村山浅間	富士宮市村山字水神	寺社境内	礫石		土坑				
73	二股村	富士宮市粟倉久保谷戸	道路脇	一字	釈迦・阿弥陀石仏	石室	宝永6	念仏講・阿闍梨宥伝	巡礼成就	
74	植田薬師堂	沼津市植田	寺社境内	多字	山型角柱		嘉永3	安右衛門ほか無著尼	村中安全	大乗妙典石経塔の碑文
75	植田上原	沼津市植田上原	海岸	一字	丸角柱		享和3	願主・世話人		一字一石の碑文
76	大平円教寺	沼津市大平	寺社境内	礫石	山型角柱		明治31	田伐・田近		石経の碑文
77	柳沢	沼津市柳沢	寺社境内	一字	題目碑		天保11	日成		一字一石の碑文
78	赤野観音堂		寺社境内		観音		享保3	小野氏	日行菩提	礫石経か不明
79	大塚	沼津市大塚	墓地	礫石	自然石		嘉永元	井口利兵衛前田新左衛門母		石経塔の碑文

No.	名　称	所　在　地	立　地	種類	地上標識	地下構造	年　代	造　営　者	目的	そ　の　他
80	吉田町石行さん	沼津市吉田町	集落内	一字	自然石		天明4	当村中	書写供養	
81	玉井寺1	清水町伏見	寺社境内	一字	三界万霊塔		明和4	萬淑	万霊供養	一字一石の碑文
82	玉井寺2		寺社境内	一字	宝塔		明和元年	萬淑・高遠石工池上氏	火坊	一字一石の碑文
83	宝池寺		寺社境内	一字	地蔵石仏		明和8	近隣・祖仙・	群霊供養	台座一字一石の碑文
84	東光寺	清水町長沢	寺社境内	一字	宝塔		天明2	近隣・西国同行	円通大士供養	一字一石の碑文
85	養光寺	清水町的場	寺社境内	一字	子安地蔵		文政元年	等村常右衛門・当寺禅怡	回向	一字一石の碑文
86	慈音寺	清水町畑中	寺社境内	一字	笠付角柱		宝暦2	願主多数	守夜火盗	一字一石の碑文
87	普光寺	清水町上徳倉	寺社境内	一字	石塔		文化15	三峰栖息舜州		一石一字の碑文
88	法泉寺	清水町八幡	寺社境内	一字	三界万霊塔			素統・各檀家霊位	大回向	一字一石の碑文
89	深良町田	裾野市深良町田	寺社境内	一字	山型角柱		享保4	興禅寺住職		
90	深良町田		寺社境内	一字	笠付角柱		享保4	興禅寺住職・書写僧		
91	深良南堀	裾野市深良南堀	寺社境内	礫石	笠付角柱		文政8	渡部五右衛門・万人講		
92	珠泉院	西伊豆町大田子	寺社境内	礫石	自然石					
93	正法院内	西伊豆町田子	寺社境内	一字	笠付角柱		宝暦4	芹沢氏	追善・福楽増長	一石一字の碑文
94	延命寺	西伊豆町海名野	寺社境内	礫石	自然石		元治2	佐久間利三郎・弟久七		写石供養の碑文
95	日金山2	熱海市伊豆山	山頂	一字	塚	土坑				
96	長浜	熱海市上多賀	海岸	一字	石塔		享和3	大中		石経塔の碑文
97	初島	熱海市初島宮ノ前	寺社境内	礫石			安永7			
98	妙隆寺	伊東市和田	堂下	一字		土坑				ⅠからⅢ遺構あり
99	法華塚	伊東市富戸	丘腹	礫石	塚	礫積				一字一石の碑文
100	見高	河津町見高	寺社境内	一字	地蔵石仏					一字一石の碑文
101	奥原	河津町梨本	山頂	一字	角柱					一字一石の碑文
102	観音山		丘頂	礫石	石塔		寛政2			石経塚の碑文
103	栖足寺	河津町谷津	寺社境内	一字	石塔		安政3			一石一字の碑文
104	禅福寺1	下田市白浜	寺社境内	礫石	石塔		文政4			一石一字の碑文
105	禅福寺2		寺社境内	礫石	石塔		文久3			
106	田牛	下田市田牛	集落内				天保8			詳細不明
107	高根山	下田市河内	山頂	礫石	石塔		弘化4			
108	下流	南伊豆町下流	平地	礫石	石塔		嘉永6	幽□代		
109	伊浜	南伊豆町伊浜	寺社境内		石塔		万延元年			お経塚の名より
110	栄源寺	伊豆市土肥	寺社境内	礫石						
111	禅叢寺	三島市玉川	寺社境内	礫石	石塔					一石一字の碑文

区別ができていない部分があり、その影響の強さがみられる。基本的には経塚とは書写した経典を納経した納経施設と地上標識のことで、経典が埋納されていない修法壇や塚は含まれない（註１）。

近世の礫石経の埋納には、古代の経塚のような小さな塚を築き埋納する例はあるものの、多くは石塔や石碑（経碑）、石幢、石仏の下に埋納する例が多く、見た目でもそれをそのまま経塚と呼ぶべきか検討の余地がある。たしかに森町三島神社の社前の平地には「経塚」と刻まれた石碑があり、島田市大代の経塚山では丘陵頂部に「納経塚」という石碑が建立されている。書写した法華経を埋納したと銘文に刻まれているが、塚を築いているわけではない。石碑（経碑）では供養塔という碑文が多い。これを含め広義、経塚と便宜的に呼ぶとすれば、塚を築かない場合も礫石経塚という概念もありうるだろう。

そもそも塔とは、ストゥーパという古代インドの墓であり、釈迦入滅以後、単なる墳墓ではなく、記念物としての性格が強くなり、仏の骨である舎利や遺髪・記念品を埋め、レンガや石で構築されたものである。それがのちに中国や日本で死者の追善のために立てるものを卒塔婆や塔婆と呼び建物を塔と呼んでいる。すると土盛の塚も石塔・石碑も写経し納経したことを記念する標識と評価できよう。

３　角庵Ⅱ遺跡周辺の礫石経（第125図，図版60～62）

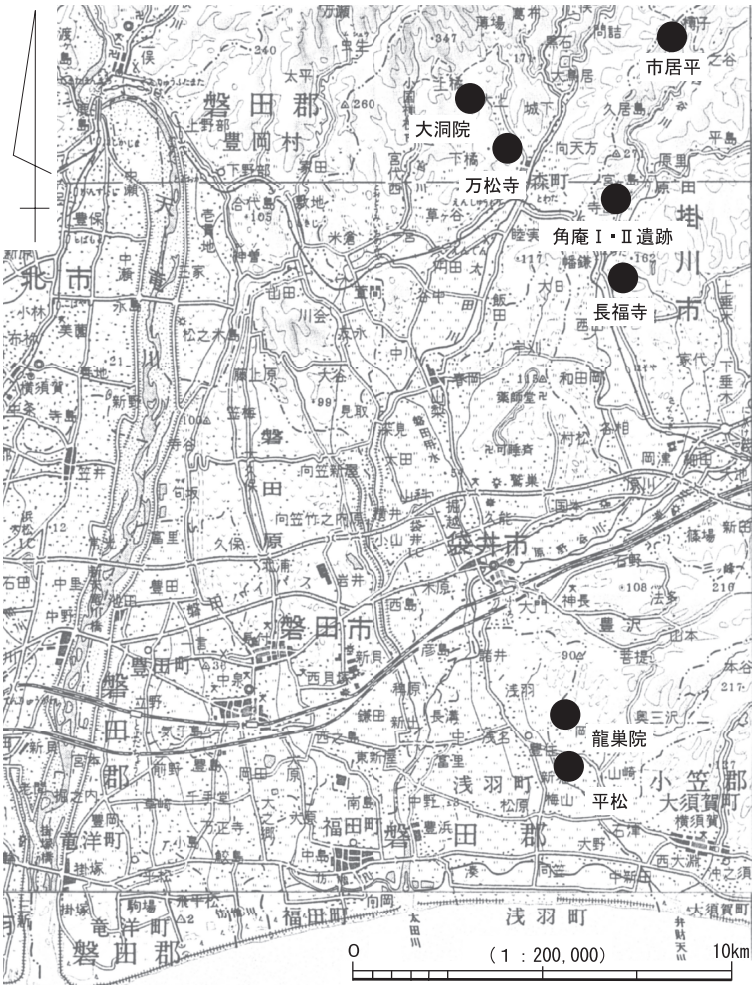
長福寺の礫石経　大谷宏治氏（松井・大谷2001）が紹介している経塚で、経塚のある長福寺は掛川市本郷にある曹洞宗の古刹である。この裏山に円墳があり、その発掘の折、礫石経が発見された。礫石経は長径8.3～3.8cm大の扁平な川原石に書写した一字一石経である。古墳の頂部に埋納された例である。

市居平経塚と経碑　昭和50年８月、角庵Ⅱ遺跡の北側にある掛川市中西ヶ谷市居平の茶園開殖の際、四角形の盛り土の塚から一字一石経が出土した。その年の秋か冬、当時、森町で発掘調査をしていた足立のもとに山下茂吉氏がこの一字一石経を持参し、何頃のもので何であるかを照会した。足立は説明をするとともに、掛川市教育委員会に連絡した。その後、山下氏の書いたもの（山下1977）と現地調査の結果に基づき、関係深いと思われる経碑について以下、述べてみたい。

掛川市の山間部にある市居平は、海抜300mの丘陵尾根部にある集落である。江戸時代の地誌『掛川誌

稿』によると、江戸時代以来５戸で村を形成し、村中に神祠仏堂なしとされていた。発見された経塚にはもともと球形の自然石が据えてあったが、茶園にするため共同墓地に移動したという。この石はよく「サイ」の神などに見かける直径55cmの丸石で、経塚が村の入口にあたることも関係するのであろうか。

出土した経石は一字一石経である。礫石経は長径4.5～２cm大の扁平な川原石に佛、偈、身、来、在、道、壇、流、常、傳などの文字を書写していた。総数は約１万個が出土し、特別な埋納施設はなく、赤土をたたき締めてあった中から経石は出土したというから、基盤の赤土を掘り込んで、埋納してあったのであろうか。そのうち36個の経石を確認したが、大半は別の場所に埋納したという。山下氏はこの経塚造営について、「かつて原因不明の不審火があって、それから村を守るために多くの僧侶によって読経した」という村の伝承を紹介し、これが経塚造営と関係するのではないだろうかとしている。



第125図　角庵Ⅱ遺跡周辺の礫石経塚

共同墓地には「○（日輪）　大乗妙典壱曲」と刻まれた高さ約１ｍの自然石がある。裏には「発記　安芸産人独沙弥郎写　当村鈴木伝次郎建立　天保八□□□□」（銘文の旧字は常用漢字に直す）と刻まれている。安芸の聖による大乗妙典である法華経の書写を天保８年に行った記念碑である。おそらくこれが市居平の礫石経書写業をさすと考えられる。沙弥の号から遠く安芸から来た脱俗の人物を感じる。

万松寺の経碑　万松寺は森町天宮にある曹洞宗の寺院で、経碑は境内にある。経碑は笠付角柱形式で、銘文にはおおよそつぎのように彫られていた（森町1998）。

虚相元室上座と玉室妙桂尼上座の菩提を住職の要淳が供養

妙経（法華経）千部読誦石書一部塔

文化九年壬申仲春吉祥旦

功徳者は福徳を、亡者は苦を離れ、天下安全　国土栄盛　寺門繁昌などを願う

施主　□光　密院本丁上人　堀尾忠兵衛　経石施主貞栃信女（旧字は常用漢字に直す）

これによると法華経の読誦と礫石経一部の書写が２人の人物の菩提供養のため行われ、施主には石塔や供養の施主とともに経石を準備した人物（書写した人物か）がいたことがわかる。礫石経は経碑の下に埋納されたと考えられる。

大洞院の経碑　大洞院は遠江、駿河における曹洞宗大源派の中核寺院で、森町橘にある。境内にある経碑２基は笠付角柱形式で、銘文にはおおよそつぎのように彫られていた（森町1998）。

石書金光明経塔
願主現住法千が誌す
喜山派三州長泉寺代化主末山六箇寺主
施主十万諸壇越等
寛政辛亥（三）年五月
石書経王塔
為御地頭所安全
森町　華蔵庵宗峯　石川儀兵衛
施主粟倉村北嶋仲右衛門
七月（旧字は常用漢字に直す）

このことから金光明経と法華経を礫石経として書写し納経したこと、このために三河や隣村天宮の末寺などを願主とし、粟倉村の組頭で酒造業者の北嶋仲右衛門のような近隣の有力者とともに、十万壇越等の文言から広く布施を募ったことが判明する。

龍巣院の一字一石経　龍巣院は袋井市五十岡にある曹洞宗の古刹である。門前の小堂には観音石仏があるが、この堂内の石仏周囲には一字一石経が納められている。石仏の台座には「平民村村松九兵□□、同姓□□」と刻まれ、石仏の施主のひとりが近隣の有力者とその一門であることがわかる。礫石経納経がどのような願主や施主に依っていたかはなお不明であるが、地上標識としての石仏建立が近隣の人々によるものであることは重視したい。

平松経塚　戦前、袋井市岡崎字平松にある四宮右近脇屋敷と伝えられる土塁から5,320個の多字一石経が出土した（山崎常盤1932）。現存している礫石経の一部を足立が釈読したところ、この経文は法華経の観持品、神力品、従地湧出品、授記品であることが判明した。出土地の近くには経碑などは認められなかった。出土地の四宮右近脇屋敷については、今川家家臣三浦右衛門が自刃した場所という伝承があり、横須賀城主となった大須賀康高がその菩提を供養するために、宗有寺（曹洞宗龍巣院末）を脇屋敷の一角に建立した（八木1936）。出土地からすれば出土した礫石経もこのことと関連するかもしれない。

角庵Ⅱ遺跡周辺の礫石経塚の特徴　角庵Ⅱ遺跡周辺の礫石経については、以上の通りである。このことから２、３の指摘をしたい。

どのような場所に納経されるかであるが、角庵Ⅱ遺跡の場合、寺社境内や居住域ではなく、集落を見下ろす村のやや高台であった。その点では市居平経塚の立地と同じである。しかし多くは寺社境内、もしくはその近接地である。平松経塚の場合、埋納地に意味があるかもしれない。

つぎに埋納地に設けられる地上標識の存在である。市居平経塚や古墳の頂部を利用した長福寺経塚の例のように、土盛りの塚もあるが、石塔、石仏もある。これは年代や造営目的の違いもあろうが、施主、造営者の広がりとその布施によると考えられる。

つづいて年代である。経碑・石仏の銘文では18世紀後葉から19世紀前半であり、多くは一字一石経であった。現状では平松経塚の年代は不明であるが、のちに県内の例からのべるが、多字一石経も18世紀代にも認められる。

ではどのような人々・宗派がどんな目的で礫石経も埋納したのであろうか。経碑・石仏の銘文によれば、礫石経書写と埋納の目的は現世にあっては福徳がおよぶこと、亡者にあっては苦を離れ成仏すること、その他菩提供養、天下・地頭所安全、国土栄盛、寺門繁昌、市居平の伝承では防火である。

この地域の礫石経施業とは、どのような宗派が勧めたのであろうか。経碑・石仏の銘文や寺院の宗旨、そして江戸時代の村と檀那寺の関係を角庵Ⅱ遺跡のある寺田村や市居平村の含め検討すると、この地域では曹洞宗太源派が施業を勧めたと考えられる。

４　各地の礫石経（図版61・62）

（１）遠江

浜松市北区三ケ日の北平と佐久米の例は、石碑、石塔のほか２例に六角形の龕と石幢を地上標識の塔としている。北平の例は墓所と屋敷地にあり、銘文から書写された経典は法華経と金光明経と刻まれている。一門の墓所に礫石経書写と埋納を行った施主の大野氏は天領北平の村役人の家柄である。

佐久米では地下より壺に入った多字一石経が出土した。地上の石幢には仏像２体が浮き彫りされている。北平と佐久米とも檀那寺の宗旨から曹洞宗寒厳派の施業と推定される。

北区引佐白岩正眼寺は臨済宗方広寺の末寺で、境内に「経塚供養塔　再建文政九丙戌年・・」と刻まれた観音像がある。同じ引佐の四方浄にある、推定で高さ２m50cm前後の大形宝筐院塔内部から多字一石経が出土した。宝暦６（1756）年の銘文からは（引佐町教育委員会1987）、世間の諸々の人々である衆生が一切如来陀羅尼などを書写したこと、「百病万病一時消滅、寿命延長、天下泰平国下安全」などを願っていることが判明する。銘文と建立された場所から四方浄の真言宗寺院般若院（現在は廃寺）が施業を進めたと考えられる。

磐田市大原にあった惣墓の発掘調査で、K－13－２号墓と呼称された塚遺構から礫石経が出土した。一辺２m、高さ0.55mの範囲に一字一石経を埋め、その上を盛り土したのであろうか（平野和男1984）。墓地という立地から万霊供養の願意が推定される。

昭和７（1932）年、磐田市見付にある見付天神社の本殿内陣直下から、400個余りの法華経を書写した多字一石経が出土した（山崎1934）。法華経の力で社殿を加護する意味と推定している。

牧之原市では黄檗宗智生寺寺山に一字一石経を積み上げた大形経塚がある。同市平田の臨済宗妙心寺派の中核寺院平田寺があり、その末寺や集落に一字一石塔が認められる。海老江では古墳の上に石塔が建立され、ある人物の父母追善のため、多くの善男善女が石を拾い、写経した旨が刻まれている。村中総出の業といえよう。

曹洞宗太源派石雲院境内には元禄３（1690）年銘の石経書写塔がある。これは「武州小机雲松院別峯叟宗天敬白」とあり、小机雲松院とは同じ曹洞宗寺院である。当時、石雲院は輪住寺院であったため、遠い武蔵の僧侶によって、石経書写が行われたと考えられる。それより以降の18世紀中葉～19世紀には石雲院の末寺についても石経書写と塔・石仏建立の業を進めている。吉田町の長源寺（曹洞宗）では石積みの段の中に埋経したと考えられる。

旧遠江分である島田市大代にある経塚山山頂にある納経塚と刻まれた石塔には、寛延３（1750）年に法昌院（曹洞宗）八世了積が建立し、雨乞いに書写した法華経を埋経したと刻まれているが（佐藤2003）、埋納した経文は紙本経か礫石経か不明である。多くの小さな礫が積まれていることから、礫石経の可能性がある。榛原南部については曹洞宗・臨済宗・黄檗宗の禅宗が施業を進めたと考えられる。

（２）駿河

大井川に沿った島田市笹間の馬場平経塚（鈴木1988）と本川根町土平経塚（池田純2003）では不時の発見であったが、その直後、発掘調査され報告されている。土平経塚では土坑に埋納された多字一石経の法華経が確認された。詳細はそれらの報告によられたい。

焼津市（旧大井川町）飯淵には「石経（いしぎょう）さま」と呼ばれる「いぼとり」に効果があるという地蔵堂がある。地蔵仏には一字一石経塚と刻まれている。地蔵の台座に一字一石経は納められているのであろう。現在は真言宗長徳寺が管理している。

島田市東光寺の天台宗東光寺には明和８（1771）年銘のある経碑がある。釈迦三尊の種子があり、大乗妙典石経塔と刻まれている。島田市道悦の墓地には慶応４（1868）年の経碑がある。荼毘跡や火葬墓

とともに礫石経の発見された藤枝市衣原遺跡、同様に火葬場であった静岡市田町ヒヤノ土手経塚からも礫石経が出土した。これは「妙法蓮華経　巻第五」と一石に品題を書くが、経文は一字一石である。

静岡市内において寺社境内にある経碑は、福寿院門前、宝蔵寺、光福寺が曹洞宗寺院にあり、清水区上原の千手寺が黄檗宗寺院にある。

日蓮宗勢力の強い富士川流域の富士市、富士宮市には、日蓮宗独特の髭題目塔や題目碑の石経書写碑（経碑）が多い。経碑建立の契機は講をつくっての書写業や日蓮上人の遠忌供養の書写業があり、日蓮宗による施業が圧倒的に多い。光栄寺の経碑のように、文政12（1829）年に起こった大風雨による富士川渡船事故者の追善供養の書写業という痛ましいケースもある。翌年に建立された経碑には建立者の中に甲斐三河岸とあり、水難者の家族も加わったものと推定される。清源院（曹洞宗）の石経供養塔の碑文には渡船岸場安全と刻まれている。この辺も富士川流域の願いであった。

富士宮市粟倉二股村経塚は、巡礼成就を記念して宝永７（1709）年に書写した法華経をおさめたもので、本願の僧侶と施主と助縁者の氏名が刻まれている。一字一石経は立像と坐像の２体の釈迦如来の石仏、の台座とした石箱内に納められていた（若林他1987）。結縁者は念仏講の男女46人と大口の施主である。なおこの地の字（あざな）は十三仏と呼ばれ、念仏講では死者を追善する初七日から三十三回忌の十三仏を信仰するが、このことと一致する。つまりこの地の念仏講を結縁者とした石経供養といえよう。

富士宮市村山浅間神社は、明治以前、神仏習合の富士山興法寺の一山組織からなり、大棟梁権現社、大日堂、七社浅間社諸堂を本山派の村山修験が管理していた。一字一石経は大棟梁権現社跡の近くで出土した。土坑に埋納されたものと推定される。

駿河の礫石経供養は富士川流域の日蓮宗による施業と修験との係わり、さら念仏講による結縁が特徴といえよう。

（３）駿東・伊豆

旧駿河に属する駿東地域は西伊豆と関係深いので、ここに述べる。裾野市の寺院は曹洞宗６寺と念仏系の浄土宗６寺、時宗２寺、真宗２寺がある。裾野市深良ではいずれも曹洞宗寺院が石経書写と造塔を勧めているが、念仏系寺院は関与していないことが明瞭である。沼津市では臨済宗寺院に次いで、日蓮宗寺院があるが、柳沢妙蓮寺の題目塔は一字一石を書写した旨を刻んでいる。住職の日成を本願とし、近郷近在の人々の寄進によって建立されたとしている。真言宗赤野山観音堂には十一面観音の石仏台座に法華経普門品読誦と光明真言十遍を書写したことが刻まれている。紙本経か礫石経かは明確ではない。

清水町から西伊豆町の西海岸では臨済宗妙心寺派寺院に一字一石の碑文をもつ石塔・石碑が多い。法華経や金剛般若経、宝筐院陀羅尼、尊勝陀羅尼など書写を行い、三界万霊等、火坊、諸霊供養、円通大士（観音）供養、子安地蔵による回向、守夜火盗の願ったのである。

その中で注目したい例は、臨済宗妙心寺派中興といわれ、「駿河には過ぎたるものが二つあり、富士のお山と原の白隠」とまで謳われた白隠の影響である。清水町玉井寺の三界万霊等の文字は白隠の筆勢壮大といわれた書である。これは檀家星屋氏らによって建立され、金剛般若経六巻の一字一石経が塔に納められた。この塔以後、清水町の臨済宗寺院で、一字一石経書写と塔建立が広がりを見せる。結縁には近郷近在の人々ばかりでなく、江戸在住の人物が連なっている。礫石経書写と造塔によって寺院と檀家や信者との距離を大きく縮めたのである。白隠は仮名法語などわかりやすい叙述と説法で民衆の心をつかみ、さらに弟子の育成をすすめたことは広く知られるところである。礫石経書写と造塔を通じて仏教も広く民衆のもとへ入っていったのであり、これは白隠の目指したところでもある。この地域の臨済宗寺院の広がりに大いに影響を与えたといえよう。

伊豆東海岸にふれる。熱海市伊豆山にある真言宗走湯山般若院の末寺東光寺裏山には、日金山経塚が

ある。カワラケと渡来銭２枚と一字一石経が出土した。礫石を積み上げ盛り土した塚で、中世後期と考えられる。県内では古い例ではあるが、市史（熱海市史編纂委1972）によれば、一時一石経2,500個が出土したという。熱海市初島東明寺（曹洞宗）には安永７（1775）年の石経塔がある。

伊東市和田の妙隆寺（日蓮宗）堂下の土坑３基から礫石経が３～12点が出土した（尾形礼正ほか1989）。報告書では14世紀後半の遺構とするが、時期の決め手となった陶器片は小片で、混入であろうから、14世紀後半以降としか判断できない。寺院の建物建立や改築に伴うとすれば、江戸時代の中・後期の可能性が高い。

河津町見高の一字一石供養とあるが、臨済宗建長寺派の真乗寺の境内にある。河津町谷津にある栖西寺（臨済宗建長寺派）一石一字本願経と刻まれた石塔がある。下田市禅福寺（曹洞宗）一字一石の石塔がある。東海岸は曹洞宗・臨済宗（建長寺派）・日蓮宗による礫石経書写と造塔活動が、幕末に多く行われた。

５　まとめ

（１）年代と宗旨（第35表）

熱海市日金山の例を除くと、石碑、石塔、石仏の銘文から県内の礫石経の年代は、17世紀後葉から明治31年までの例があり、多くが18世紀後半～幕末であった。立地をみると、磐田市見付の天神社本殿床下の例のごとく神社もあるが、寺院境内とその周辺が大半を占める。

では礫石経書写と納経に関連深い宗派はどの宗派であろうか。江戸時代の宗派の分布を知る手がかりとして、静岡県仏教会による『寺院名簿』（平成５年度調査）に基づき（静岡県仏教会1993）各地の宗派別一覧を掲げた。角庵Ⅱ遺跡の周辺、掛川市・周智・袋井市では圧倒的に曹洞宗太源派寺院が多く、その寺院に経碑・塔が建立されていることからも、礫石経施業に大きく関わっているといえよう。浜松市北区三ケ日の例は曹洞宗寒厳派寺院の施業と推定され、北区引佐の例は臨済宗方広寺末寺と真言宗の小

第35表　静岡県における寺院の宗派（静岡県仏教会1993による）

No.	郡・市町	曹洞宗	臨済宗	黄檗宗	日蓮宗	法華諸宗	浄土宗	時宗	真宗	真言宗	天台宗	諸宗派	総数
1	下田市	20	7		3		5		1	1			37
2	東伊豆	15	9		2		2		2				30
3	南伊豆	16	8				2		1	3			30
4	西伊豆	2	29		3		4		1				39
5	田方郡	65	29	1	46		11		7	5			164
6	伊東市	19	1		13	2	5		1			1	42
7	熱海市	10	4		3		6		1	3			27
8	三島市	10	13		16		9	3	3	2			56
9	沼津市	9	46	1	12	17	5	7	3	4		2	106
10	御殿場市	4	2		4	2	8						20
11	裾野市	6					6	2	2				16
12	駿東郡	12	18	1	5	5	1		2	1			45
13	富士宮市	8			37		4		1				50
14	富士市	20	4	5	38	1	6	1	3	1			79
15	富士郡	1	2		17							6	26
16	庵原郡	11	14		10	1	2		1	1			40
17	清水市	28	56	1	22		4		3	5			119
18	静岡市	107	38	1	15		17	3	10	3		1	195
19	焼津市	32	1		4		5	3		1	1		47
20	藤枝市・志太郡	93	7		6		7		1	3	1		118
21	島田市	37		2	2		4		1	3	2		51
22	榛原郡	70	11		5		6	1	5	2			100
23	小笠郡	60	17		9	1	4		7	4	2		104
24	掛川市	66			3		3		6	4			82
25	袋井市	40	2		1	1	1		1	5			51
26	磐田市	21	10		2		3	2	3	2			43
27	磐田南	49	6		1		3	1	2	2			64
28	磐田北	44	10		2		1			1			58
29	浜松市	72	92	4	13	1	12	3	8	5			212
30	旧浜北市域	17	28	1	3					1			50
31	湖西市	14	4		5	7		1	1				32
32	浜名郡	6	14			1		1		1			23
33	周智郡	42			2		1			3	2		50
34	引佐郡	25	40	1		1				6			73
	総計	1051	521	19	304	40	147	28	77	72	8	12	2279

寺院による施業であろう。浜名湖西岸湖西市には広義日蓮宗の古刹本興寺と妙立寺があって、題目碑も建立されているが、石経供養の文言はない。富士川流域に盛んにあった身延山を総本山とする門流の礫石経供養と異なる。この２寺が日蓮宗身延派ではない点に要因があるのであろうか。県内においても広義日蓮宗諸派の門流があるが、明治以降、身延山を総本山とする門流のある沼津市域と伊豆に礫石経供養がみられる。

臨済宗寺院は、旧浜松市・浜北市域、旧清水市庵原郡に妙心寺派寺院が多いが、礫石経施業にあまり係わってはいないようである。駿東・伊豆地域では妙心寺派と建長寺派寺院による施業が盛んである。

真言宗は別当寺院として係わる例があるが、少ない。天台宗は本山派修験村山浅間神社の例、島田市東光寺の例があるが、もともと県内には寺院そのものが少ないので、盛んに進めたかの判断材料にはならない。念仏系の浄土宗・時宗、浄土真宗は県内寺院の11％をしめるが、礫石経施業には関与していないようである。

（２）礫石経に託した願い

経碑・石塔・石仏には礫石経施業の願意が書かれている。両親の追善供養、病気退散、寿命延長にはじまって、天下安全、国土栄昌、寺門繁昌、火坊、降雨祈願、守夜火盗、巡礼成就記念、水難事故者の供養と渡船岸場安全と幅広い。墓地での納経は有縁・無縁の諸霊への供養であろう。

ところで、この時期の庶民にとって天下安全、国土栄昌とは何であろうか。江戸時代における17世紀は新田開発・人口増加の成長期であったが、近世の三大飢饉といわれている享保・天明・天保の飢饉の頃には停滞や下降期へと移行した。『自然災害年表』（静岡県1996）によると、この時期は洪水、旱魃、暴風雨などの天災や火災が多い時期である。四方浄の「病消滅寿命延長」もこの年、疱瘡が流行したことによるかもしれない。文政13（1830）年銘の富士市光栄寺題目碑にある富士川の水難とは前年の大風雨による渡船流失と破損によるものと推定される。この時代、村中安全にはじまり広く天下安全、国土栄昌を願うこととは、飢餓や天災・人災を避け、穏やかに過ごすことではないだろうか。

では、どのような人々が礫石経の施業を支えたのであろうか。どうやら藩主・旗本・代官などの名前は認められないようである。白隠は例外として、歴史に名をとどめる僧侶も関係していない。地方にあっては中核寺院の大洞院や石雲院、実相寺、富士山修験の中核村山浅間神社への施業もあるが、多くの寺院がその末寺の施業が多い。遠国の僧侶や聖が写経や願主になった例もあるが、多くの施主と写経者・礫採取者として結縁した人々は、村・町役人や近郷・近在の人々の念仏講や村中とされた人々であった。もっとも清水町宝池寺の例のように、結縁者には武家と思われる高崎家中の人々、陣屋役人、江戸の人物や若者中、近利諸位禅師とあり（清水町教委1992）、大がかりのものもあるが、これは例外である。

江戸時代の寺院と庶民の関係は幕藩体制の支配体制に密接に係わり、檀家制度と葬式仏教の二語に代表されるように固定化、形式化したとされる。ところが、森町の寺院を調べたところ、諸宗の本末制度と寺檀制度の整備とともに、17世紀代に寺院の建立が飛躍的に増加したこと、18世紀中葉から後葉以後、小寺院の存続が困難になっていったことを指摘した（足立2008）。先にふれたように、この時期、幕藩体制は停滞や下降期へと移行し、地域の小寺院を檀・信徒が支えきれなくなったことによると思われる。

では、この時期の礫石経施業はどのような意味をもつのであろうか。県下の曹洞宗寺院のうち太源派はもともと「曹洞土民」といわれるように、葬式の庶民化を通じ布教活動をすすめた実績をもっていた。追善や万霊供養、はては雨乞いなど礫石経施業の願意は多面的である。

他方、臨済宗は18世紀に入り、白隠の仮名法語に象徴されるように、仏の教えを民衆に通じる卑近な子守唄などにして伝え、民衆主体の布教活動に変わっていった。駿東や西伊豆に臨済宗寺院に火坊や守夜火盗などより庶民の願意を汲み上げた礫石経施業があり、六道輪廻の思想のもと、有縁、無縁の三界

万霊供養などの願意がみられる。また、日蓮宗身延派（総本山身延山）甲斐でも多くの礫石経施業を行っている。もともと法華題目主義であり、法華経の写経は重視されているからである。

県下の礫石経施業は、時代の停滞や災害の影響に対抗するため、また寺院経営をより安定させるという寺院側の思惑もあって、庶民の願意を深く汲み取りつつ実施された寺院と壇・信徒との共同作業と評価したい。

註

1　今回、本書で示した一覧表は国立歴史民俗博物館が実施した全国経塚データベース調査の際、静岡県担当調査委員足立とその協力者であった勝又直人・高野穂多果・栗木崇が作成したものに足立が加筆したので、原則各人が現地調査をしたデータに基づいている。その際、経塚ではないものや不明の例を取捨選択している。そのため従前の経塚地名表よりさらに現地に即している。

参考文献

足立順司　2008　「森町の寺院」『森町の中世石塔』
熱海市史編纂委員会　1972　『熱海市史 資料編』
池田　純　2003　「土平経塚」『本川根町史 通史編１』
石川治夫　1993～98　『石仏・石神調査報告書１～４』
引佐町教育委員会　1987　『引佐の石仏』
尾形礼正他　1989　『妙隆寺遺跡発掘調査報告』
勝又直人　2010　「第３章　衣原遺跡　第３節４　５区」『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群』静岡県埋蔵文化財調査研究所
佐藤正知　2003　「主要遺跡の概説」『金谷町史　考古・窯業史編』
静岡県　1996　『静岡県史』別編２　付録　自然災害年表
静岡県教育委員会　1998　『身延街道』
静岡県仏教会　1993　『寺院名簿』
清水町教育委員会 1992『清水町の石造文化財』
鈴木良孝　1988　「県内の礫石経塚」『馬場平経塚発掘調査報告』
関　秀夫　1984　『経塚地名総覧』
平野和男　1984　『大原墳墓群調査報告書』
富士宮市教育委員会　2002　『村山浅間神社跡』
松井一明・大谷宏冶　2001　「長福寺出土の遺物について」『静岡県考古学研究 33』
望月薫弘　1964　「静岡県の経塚」『静岡県の古代文化』
森町　1998　『森町の棟札・金石文』
八木美穂　1936　『郷里雑記』（活字版）
山崎常盤　1932　「会場付近の遺跡概説」『遠江郷土研究会誌　第７号』
山崎菊丸　1934　「経石」『遠江郷土研究会誌　第13号』
山下茂吉　1977　「経文を記した石塚とそれにまつわる火の伝説」『中遠の伝承故事』
若林淳之他　1987　『駿州富士郡二股村経塚』